

G. Greene 研究

—ふたりの Rose—

(その2)

宮野祥子

(承前)

III-1

ふたりの Rose —その1—のII章で考察したように、*Brighton Rock* の Rose Wilson 及び *The Confidential Agent* の Else と Rose Cullen の三人の女性の特色は、子供であること、或いは子供のもつ、純心さ、素直さ、単純さ、無知といったイメージが与えられていることであった。そして彼女達の <innocence> であることが、ドラマを進展させる契機となり、或いは、作品の内部構造を支える要素となっていると考えられたのであるが、本章でも、同じく子供ということばで形象されている二人の女性、*The Ministry of Fear* (1943) の Anna Hilfe と、*The Heart of the Matter* (1948) の Helen Rolt を取り上げて、その特色、変化について考察してみたいと思う。

同じように子供のイメージを与えられているけれども、II章で述べた女性たちと、この Anna Hilfe と Helen Rolt の異っている点は、おとなである女性が、子供というイメージを与えられていることである。それはこの女性たちが両者共、それぞれの作品の主人公である、Aurthur Rowe と Henry Scobie に設定されている、憐憫という性格の対象となっているからである。つまり、子供というイメージは、Rowe や Scobie の憐憫が相手に喚起するイメージとして用いてある、ということである。II章で述べた、子供ということばで描かれた女性たちは、そのまま <innocence> を具現する存在であったのだが、Anna と Helen は彼女たちを見る Rowe と

Scobie の視界のなかで子供というイメージが与えられていることを明らかにしたいと思う。Rowe や Scobie にとって、子供のイメージは、庇い、被護すべき<innocence>を秘めているはずである。だが、Anna や Helen は、Rowe や Scobie の予期しない言動をする女性として形象されていて、子供からおとなへ、<未熟>から<成熟>へと変貌している女性となっているのである。そうであるならば、Rowe や Scobie が女性のなかに見たのは、子供つまり<innocence>の幻であり、<innocence>が人を捉える魅力であろう。それは<無垢>の功罪とも言うべき力であると言えないだろうか。

また、本論は、I 章で述べたように、*The Living Room* (1953) の Rose 像の変化を考察するためになされた、<未熟>から<成熟>への過程にある女性像の分析でもある。

なお使用テキストは、*The Ministry of Fear*, 1973, *The Heart of the Matter*, 1971, William Heinemann & The Bodley Head の版である。

*

The Ministry of Fear の Anna は、主人公 Aurthur Rowe が心ひかれ、愛する女性であるが、この作品の重要なポイントであり、内部構造となっているのは、Rowe の性格として設定されている、人間の抱く憐れみの感情である。Rowe の愛する Anna 像を理解するために、まず Rowe について少し述べてみたい。

愛が創造的であり、永遠にいたる確認である(注1)のに、それと良く似ている憐憫は、<それ自体善でもない、悪でもあり得ない、何故なら憐憫とは他者の苦悩を前にした時、防禦本能が起す反射作用>であって、<受身と悲哀という形>(注2)をとり、結果として、人間の破滅と破壊(注3)とを導いてしまうと述べられているが、この憐憫という危険な感情に心動かされるのが Aurthur Rowe である。Rowe は少年の頃、ねずみが犬になぶり殺しになるのを見かねて、思わずねずみを殺してしまうような、優しさ、強

い敏感な感受性をそなえていたのであるが、やがて結婚し、妻が不治の病気で、その苦痛に耐えかねているのを見るにしのびず、彼女の同意を得ないまま、薬殺する。彼にはこのような過去があり、法的には彼は、*<a mercy killing>*として赦されたものの、自分の行為に対する呵責と、世間の人々の黙殺に耐えて生きているという設定になっている。第二次大戦中の空襲の激しいロンドンで、彼は或る日、慈善バザーにふと足をふみ入れたことから、英国の重要機密を写したフィルムをめぐるスパイ事件に、巻き込まれてしまう。そのスパイ事件の首謀者である *Hilfe* を兄とするのが *Anna Hilfe* である。兄妹の素性と事件の真相は、ほとんど最後まで明らかにならず、*Rowe* を中心に、フィルムの入ってあるケーキ、偽装殺人事件、爆発による記憶喪失、院長がスパイの一味である精神病院への入院、脱走、スパイ一味の逮捕、*Hilfe* の自殺など、といった物語が、*Rowe* の亡妻に対する消えぬ罪の思い、そして、記憶喪失によって心の傷を忘れ、幸せである *Rowe* に、過去を知らせまいとする *Anna* の努力と、失われた過去の再発見をしようとする *Rowe* の願いとを底流として、展開している。

この作品は作者によれば、情報局の任務を帯びて西アフリカへ向う船上で、*Michael Innes* の探偵物語を読み、*<自分もファンタスティックでファニーなスリラー物を書いてみたいと野心をつのらせて>*、シリアのフリータウンで書かれたらしく、最初意図した*<屈託のないユーモア>*がこの作品に描けなかったのは、不自由、不潔な生活条件、特にすさまじいねずみのせいであったかも知れないと述べている(注4)。確かに探偵物としての面白さを充分そなえている物語であるが、事件を進める内的プロットとして、*Rowe* の亡妻に対する罪の思い、そのことに深く心を苛まれている彼の孤独、そのような *Rowe* を理解する *Anna*、そして、彼女の彼の幸福を願う気持などが組み込まれていて、単なる波乱に富んだスパイ事件に巻き込まれた男の話以上の、奥行き深い物語となっている。

さて、まず *Anna* の描写について取り上げねばならないのは、*Rowe* の妻を思わせる、小柄で清潔な感じの女性であり、何よりも彼の妻と同様

に、<人に苦痛を与えることは出来ない>(p.40)と思わせる女性、自分が犠牲になるのならともかく、<犯罪に巻き込まれる>(p.41)とは思ってもよらないような女性だ、ということである。その善良で清潔な印象が子供ということばで表現されていて、例えば、<人生がなしたことは、子供のようになすすぐ見つめる眼のまわりに、少しばかりの皺をつけることだけだった>(p.109) <彼女は 苛めたくなる一やさしい 仕方で一子供といった様子に見えた> (p.109) <彼女の顔は、子供の顔のように絶望しているように見えた。彼は彼女に大きな愛を、大きなやさしさを、どんな犠牲を払っても彼女を守ろうという欲求を感じた> (p.259) などがある。時には意地悪の対象であり、そして優しさや保護の対象となる子供のように、Rowe には思われる Anna を適確に伝えているのが次の場面であろう。すでにスパイ一味が逮捕されて、残るのは、例のフィルムを持った Hilfe と Anna の兄妹二人だけになってしまい、Rowe は一味がかけた電話番号を秘かに記憶し、それによって、Anna に再会することができたところである。Hilfe は、Rowe の記憶喪失の原因となったホテルでの爆発を計画し、実は Rowe と、彼に好意を寄せる Anna の二人を、殺害しようとしたのではあるが、Rowe は Hilfe からフィルムを奪うべく隣室に入ろうとして、重たい燭台を武器として、手にするのを躊躇うところである。

‘Take it. Please.’ When he made no move to take it, she picked it up herself; her face was stiff and schooled and childish and histrionic. It was like watching a small girl play Lady Macbeth. You wanted to shield her from the knowledge that these things were really true. (p.236)

表情がこわばって<stiff>、ぎこちなくて<schooled>、まるで子供がマクベス夫人を演じているような感じである、と Rowe に見える Anna の姿は、マクベス夫人に表象されている邪悪な心とは無縁の、世間知らずの純な、被護すべき少女のような存在である。このような Anna の姿は、Rowe のやさしさにうったえる、彼の憐憫の情を喚起する強いイメージと

なっている。だから、現実の彼女の行動が、芝居の虚構の世界での行動であるかのように、彼女には不似合いである、と彼には見えているのである。しかし次の場面では、彼女は拳銃を持つ兄の手に燭台を振り下すという Rowe の予期しない行動をする。それは記憶喪失によって脱落している過去を取り戻そうとする Rowe に、Hilfe がその過去を教えることと引き換えに、身の安全をはかろうとしたからである。妻の毒殺という過去を知らない現在の Rowe の心の平安が、そのまま続くことを願う Anna は、暴力で Rowe の幸福を守ったのである。それは Anna が Rowe の心の痛みを理解し、真の意味で同情(共鳴)することのできる女性だからである。彼女は彼の心を思いやって、<あなたはご自分がひどく悪いのだと思っていられっしょ><でもあなたは苦痛に耐えられなかっただけですわ。でもみんなには耐えられるのですわ—他の人々の苦痛が一果てしなく> (p.112) と言い、Rowe は<誰かが一日中、毎日、不幸であるのを見れば、どうしても心が痛んで張り裂けそうになる> (p.147) 人なのだと言っている。Rowe の心に、このように共鳴できる Anna は、彼が妻の苦痛を和らげるために、手段を選ばなかったように、<あなたがずっと幸せであるためなら何でもいたしますわ> (p.146) と、Rowe の過去を知らせないように、あらゆる努力をするのである。そのような彼女の姿は<人生の中途に達した人のような優しさを示して、彼を見つめ> (p.245) <彼を守るために、絶えず見張っている人のような様子> (p.259) をしていると描写されている。これは愛され守られるという受身の子供の姿ではなくて、人を愛し、守り、庇うという、おとなの女性の姿である。

おとなであることのもう一つの要素として、Anna が、愛のために裏切りという挫折を、体験していることを指摘することができる。<「私はいつも考えていました」と彼女が言った「あなたがたお二人共私の手に入れておくことが出来ると。…」> (p.243) と、Rowe と兄の両方共に愛することを願っていたが、彼女はどちらかを選ぶという決断をせねばならなかった。一度は、Rowe との約束を破って兄を逃がし、引き換えに得たフィルムが、Rowe の求めていた物ではないとわかると、また彼に兄の逃亡経路

を教えて、故国と兄を裏切ってしまった Anna は、〈彼女は裏切り者だ〉(p.250) という兄のことばを、甘受しなければならぬ。それは彼女の愛が、子供のような無邪気な陰りのないものではなく、心の痛みという影を伴っていることを示している。愛のために人を裏切るという設定として、Ⅱ章で述べた Rose Cullen にも、D. を救出するために、Furt を利用し裏切る、という筋が設定されているけれども、彼女は心に何の痛みも感じていない女性として、描かれている。それで、Anna の心に深い傷を残すこの挫折はⅡ章で扱った女性像—自らの内部に潜む限界にまだ気付いていない若い人間としての女性—に加えられる、新しい要素とみなされる。それは、人を愛することに伴う限界を知る女性の姿であり、善良な子供のような女性のなかに、成熟した女性の魅力、人に愛されるよりも、人を愛することの苦しみを知るといふ、内面の魅力を発見することでもある。

ところで、Anna は、Rowe の苦しみや孤独を理解し、共鳴できる女性として描かれているが、この作品の視点は、Rowe に定められているので、Anna の姿は、実は Rowe の眼に映っている姿なのである。その意味で、Rowe が愛する Anna 像は、逆に Rowe という人物を映し返えず鏡のような役割を果たしている、ということもできよう。Rowe の苦しみを理解し、その苦しみを除くために、彼の過去を知らせまいとした Anna の行動は、実は本質的には、Rowe が過去において、妻になした行為と同質であると考えられる。Rowe が妻の苦痛に苦しむ姿に、耐え得なかったように、Anna は Rowe が過去の自分の行為に心が苛まれることに、耐えられなかった。だからあらゆる手段で、特に彼女の兄が Rowe に過去を告げることを、防いだのである。しかし、自殺する直前の Hilfe から、妻を薬殺したという、自分の過去を知らされて、真の姿を取り戻した Rowe は、Anna の、彼を理解する深い心と、敏感に共鳴する優しさを思っ、自分たち〈二人が生きているかぎり平安は戻らない〉(p.258) ことを知り、〈愛することを知る者は恐怖を知る〉(p.258) ことを思い出すのである。彼は彼女に事実を知らせまい、と決心する。Rowe と Anna は〈生涯気をつけて歩まねばならなかった。口を開く前に必ず考え直してみなければなら

なかった。お互いに深く愛しているから、お互いを敵のように監視しなければならなかった> (p.260) のである。このような、お互いが相手の内面を理解するために、傷つけ合うことを恐れ、いたわるだけの愛に支えられた関係には、Rowe の過去を再現する Anna と、その彼女が、自分と同質であることを理解する Rowe とが組み込まれている。その意味で、Anna は Rowe を映す鏡であり、彼の似姿である。或いは、お互いがお互いの鏡である、と言うことも出来るのであって、それは際限なく内部へと映し返し、収斂していく、閉鎖された、危険な愛(憐憫)の世界でもある。或いはまた、Anna は、Rowe の内部にある過去のドラマを再現することによって、<生きている者のために充分苦しむならば、結局、死者さえも償うのだろうという思いがした> (p.260) という、Rowe のカタルシスを行わせる役割を負っている、と言うことも出来るのである。

* *

The Heart of the Matter の Helen Rolt を愛する主人公の Henry Scobie も、Arthur Rowe と同じように、強い憐憫の情に押流されてしまう人物である。そして、Helen も Anna と同じように、Scobie の視点から描出されているので、まず Scobie 像から理解してみたいと思う。

Scobie は、第二次大戦下の、西アフリカにある英国植民地の港町で、警察副署長を勤めるカトリック信者の中年男である。彼は、<Scobie the just> (p.9) と呼ばれる真面目な警官で、妻の Louise は、この熱い湿気の強い風土や植民地生活に耐えられず、孤独で不倖せで、Scobie が署長に昇進できないことも原因で、惨めな生活に疲れ切っている。彼が妻を愛するのは、彼女の醜さや人気のなさを憐れむ気持が、愛情に変化したときであり、彼はそれは偽りであることを知っている。疲れ果てた Louise は、南アフリカに旅行することを願うので、Scobie はその費用を、悪名高い商人 Yusef から借りる。これが、正義の人 Scobie の道を踏みはずす第一歩となる。妻の留守中、Helen Rolt という若い女性と出会い、この女性に対

する憐憫の情が契機となって、特別な関係を結ぶこととなる。これを知って、Louise が旅を切り上げて戻った時、Scobie と Louise と Helen の関係は、二重の意味をもつことがはっきりして来る。Helen と Louise のどちらも捨てることのできない Scobie は、彼の裏切りを確かめようとする Louise を察知して、告解しないままで聖体を受け、基督よりも妻への憐憫を選び、大罪を犯して、神をも傷つけるのである。眼に見えない神の苦しみには耐えられるが、妻の苦しみには耐えられないのである。こうして、あらゆることに嘘言を重ねた Scobie は、忠実で、彼が信頼している唯一の人間であった下僕の Ali をも信ずることが出来なくなり、Yusef との心理的妥協によって、Ali を、彼の手下に殺害させてしまう、という結果を迎える。Scobie は自分の存在が周囲の人を苦しめ、破滅させ、しかも最も重大なことは、自分の存在が、神をも苦しめていることの責任をとろうとして、つまり、神さえも彼の優しさ一憐憫の対象とすることによって、自殺という、唯一の道へ追い込まれていくのである。

このような Scobie 像を、<大変ずる賢い道徳的な意味での憶病者>(注5) と見なすこともできるし、エピグラフ通り、罪人こそキリスト教の精神を具現する、その典型とみなすこともできる。つまり、単なる小心な、それでいて狡猾な偽善者とするか、或いは聖人への可能性を背後に背負った、罪の人とするかである。この両極の間の中間点、作者も、<The character of Scobie was intended to show that pity can be the expression of an almost monstrous pride.>(注6)と述べているように、Scobie には、小心で優しく、それでいて狡猾であるので、偽善と知りながらも、捨てられない人間の自我の強さと、その傲慢とが、表象されているというのが、妥当なところではないかと思われる。ともあれ、Scobie を動かしている憐憫の特徴は、子供にその波長を合わせる、ということにある。<「憐れみ」は一このことは「憐れみ」の最も明白な一面であるが—スコウビィと彼のまわりにいる人たちとの関係を示す^{フォーム}型なのである。彼のこの孤独な触手は、子供たちだけを、あるいは子供のように見える人たちだけを捉える>とオドンネルも指摘している(注7)ように、Helen Rolt だけではなく、Scobie

の心に、何らかの痕跡を残す人物には、例えばポルトガル船の船長、自殺した Pemberton,そして、 Louise に恋をする密輸の密偵 Wilson には、子供ということばが時折用いてある。子供に対する Scobie の異常な関心は、臨終に立ち会えなかった、彼の亡くなった幼い娘に対する憐れみのせいであり、すべて彼の行動は、その憐れみよって生じた精神の異常のせいである(注8)、という説もあるが、精神の異常はともかく、子供に対して敏感な反応を、 Scobie が示すのは確かである。

Helen Rolt は、 Louise を旅に出して、何よりも求めていた、心の平安 <peace>を得た Scobie の前に、 瀕死の状態 で登場してくる。彼女は19才で、結婚したばかりで、船が撃沈され、夫は溺死し、40日間漂流して救助されたのである。救助活動の任務についていた Scobie が見たのは、憔悴して醜く、ひからびた指に結婚指輪がゆるんでおり、切手アルバムを1冊固く握った、子供と見間違うような小さな姿である。見るも無残な姿で登場した Helen の特徴もまた、子供ということばで、繰返し描写されていることである。それは、憐憫の情に心動かされる Scobie に、最も強力にうったえるイメージであり、彼の心のなかに入り込むこと、つまり弱者や醜い者に敏感に反応する 憐憫の対象となること、これが Helen に与えられた、子供というイメージのもつ第一の役割である。収容された病室で、子供の集めるような切手で一杯で、父親から贈られたとのサインのある、切手アルバムを見て、 Scobie は、 <「彼女に何か新しい切手を見つけてあげねばならぬ」と悲しげに> (p.148) 言うのである。身体が回復して、独りで暮らすようになった Helen を、偶然巡回中に訪ねた Scobie は、彼女が未亡人として振舞うには、あまりにも幼ないことに気付いている。

It seemed to him that what she needed more than anything else was just talk, silly aimless talk. She thought that she wanted to be alone, but what she was afraid of was the awful responsibility of receiving sympathy. How could a child like that act the part of a woman whose husband had been drowned more or less before her eyes? As well expect her to act Lady Macbeth. (p.156)

先述の Anna の場合と同じ比喩表現、〈マクベス夫人を演ずるのを期待するのと同じだ〉という描写は、同じくマクベス夫人と子供との対比によって、Helen が未亡人であるのは事実であるが、Scobie には、彼女がその事実には耐えられないであろう、と見えていることを明らかにしている。〈こんな子供〉と〈夫が溺死した女性の役〉との間にある異和感が、純心な子供とマクベス夫人の間にある距離であり、〈誰がこの愚かで当惑している子供に何か行動をするよう責任を負わせることができようか〉(p. 181)と、Scobie に思わせるのである。確かに、Helen には、未亡人というより、女子学生が親類の叔父さんに語っているという雰囲気、気楽に学生時代のことなどを Scobie に語る場面には、漂っている。彼女はまだ世間知らずで、無力であって、保護し守らねばならない存在である、と思われるのである。彼女のこの気安さ気楽さは、Scobie に大丈夫だという安心感〈security of his age〉(p.157)を与え、そのことは同時に、Helen にも、男女という意識の無い親しさを感じさせている。〈彼らは二人共大きな安心感を感じていた：彼らは友達以外の他の存在にはなり得ない友達なの〉(p.159)であって、彼らの間には、Helen の亡夫や、Scobie の妻、Helen の父や学校の思い出、何十年間の経験の違いという、安全弁が働いている。この安心感が、Scobie が切手を集めて再び訪れるという、彼の行動をうながす契機となっているが、その安心感に伴なって、子供のように思える Helen への憐憫が、Scobie を動かし、捉えているのも明らかである。

It seemed to him that he had not felt so much at ease with another human being for years - not since Louise was young. But this case was different, he told himself: they were safe with each other. He was more than thirty years the older; his body in this climate had lost the sense of lust; he watched her with sadness and affection and enormous pity because a time would come when he couldn't show her around in a world where she was at sea. When she turned and the light fell on her face she looked ugly, with the temporary ugliness of a child. The ugliness was

ここには力弱い者、醜い者を敏感にキャッチする、アンテナのような Scobie の性格の特色がよく表われている。Helen に積極的に接近しようとする Bagster の訪問がきっかけで、いわゆる男女の関係になってしまう Helen へと心が傾斜し、特に、〈手首にかかる手錠〉ということばには、彼が自殺を決心する直接の契機としての役割をはたす、「運命の女性」的な Helen に、捉われてゆく Scobie が予感される場所である。

ところで、女性像の特色という角度から見れば、主人公の男性が偶然出会う女性が、幼ない雰囲気を持ち、子供のように無知で、無力であるように思われる女性であるために、彼が心を許して、警戒せずに行動するところに、ドラマの進展の契機が置かれているという設定は、上述の Helen と Scobie の場合だけでなく、例えば、*A Gun for Sale* (1936) の Ann と Raven、*A Burnt-Out Case* (1961) の Marie と Query の関係にも見られることである。Raven が、生れて初めて心を許した Ann は、聖母的役割とユダ的役割をはたしており^(注9)、或いは、Query は〈こんな未熟な人がどんな点でも危険であり得ると考えるのは、ばかっている〉^(注10)と Marie を判断しているが、Ann も Marie も、Raven と Query が生命を失うに到る重要な導き手となっているのである。或いはまた、Scobie の場合には、Helen を無力で保護せねばならない存在であると思う彼が、彼女への愛、すなわち自己過信に裏打ちされた責任感に、自滅していくのである、とも言い得るのである。こういった、女性のもつ〈子供〉のイメージに、心を奪われた男性が挫折して、ひとつの結末へと導びかれていくプロットには、〈子供〉というイメージに対する、無条件の信頼と、それを裏切られた幻滅感が、根底に存在していると考えられる。つまり〈子供〉のイメージが喚起する、危険のないこと、害のないこと、悪気のないこと、それ故弱い存在であること、保護せねばならないこと、つまり〈無垢〉であることが、実は、男性が、子供のような女性のなかに見た幻であ

ったのだと、気づいたということであるのかも知れない。この幻滅感は、「失われた幼年時代」を取り上げるまでもなく、Greeneの示す、子供に対するオブセッションのもたらすものである。子供に対する憧憬と愛惜と、そして幻滅と喪失感は、子供が子供のままでは描かれず、例えば *The Basement Room* の Philip^(注11) や *The End of the Party* の Francis^(注12) のように、子供のなかに、すでに老人の姿を二重に映している子供とか、逆に、子供のようなという形容で、幾度もおとなが描かれていることにもあらわれている、と考えられる。例えば、*England Made Me* の Anthony^(注13)、*The Quiet American* の Pyle^(注14)、*The End of the Affair* の Sarah^(注15) などに、その例を見ることができる。換言すれば、このような登場人物は、子供によって示される、<innocence>に対する作者の憧憬と愛惜と、それに対する喪失感によって、成立しているのだと言えないだろうか。

子供に対するこの二面性は、聖アウグスティヌスの<何人も汝の御前で、罪なく、清くあるものはない。地上に生きること一日の幼児でさえも、清くはないから。>^(注16) <私は何處に、主よ、汝の僕である私は、何處に又何時、無罪であったであろうか>^(注17) という、人間の原罪観に基づくものであろう。R. Pattisonは、この聖アウグスティヌスの教義が、文学におけるイメージとしての子供の基礎をなしたと述べ、次のように解説している^(注18)。

He had connected childhood and sin, made the infant an adult of sorts, and surrounded him with a fallen nature, which existed in that condition because of man's fallen will. To this he added the concept of a second birth in baptism, a true and mysterious innocence as distinct from the seeming innocence of the child's weak limbs as the earthly city is from the city of God.

さらに続いて、聖アウグスティヌスと対立するペラギュウス派は、子供における根源的な<無垢>を、生得の<無垢>を主張する、と述べている。ペラギュウス派の説くように、原罪を否定して、人間の自由意志とそ

の力によって人間が義認されると考えるならば、子供のあらわす〈無垢〉とは、人間としての自覚のない状態を示し、それは善でも悪でもなく、人間に経過する一時期になってしまう。これに対して、聖アウグスティヌスの主張する、人間の原罪と、その救済としての幼児洗礼によって示されているのは、洗礼による再生が逆に照射する、過去における人間の〈無垢〉の喪失であると考えられる。こうして、子供に負わされた、人間の根源的な墮落とその救済の可能性が、子供にまつわる憧憬と幻滅という二面性を、もたらしているのだと考えられる。

ヴィクトル・ド・パンジュは、Greene の悪にたいする態度は、聖アウグスティヌスとペラギウスの二者、どちらの傾向もあわせもち、悪を内在している人物が、社会の不正によって悪という行動へと向わされるのだと述べている(注19)が、悪を内在させている Greene の人間観が、本質的には、子供は〈無垢〉ではないという判断を導くのは当然である。それにもかかわらず、子供のなかに〈無垢〉を求めようとする憧れは、聖アウグスティヌスの説く再生によって、逆照射されて浮び上ってくる、失われた〈無垢〉への憧れだと言えよう。そして、その失われた〈無垢〉の幻を、〈子供〉のなかに見るときに、〈おとな〉は、その幻に心奪われ、ひとつの結末へと導びかれていくのである。それは〈無垢〉の功罪とも呼ぶべき、〈無垢〉が人間を魅きつける力である。

さて、Scobie と Helen は、お互いが危険な存在ではないという安心感に支えられて、心安まる親密な関係を保っていたのであるが、それが、いわゆる男女の関係へと発展したとき、Scobie は、Helen のなかに新しい変化が生じたのに気付いている。それは、無知で素直な子供のようにあつた Helen が見せた、Louise への敵愾心と、彼の曖昧な態度を詰ることで、Louise を思わせるような激しい自己主張である。

He had underrated her power of giving pain. He could see how she had spotted her success: he had delivered himself into her hands. Now

she would always know how to inflict the sharpest stab. She was like a child with a pair of dividers who knows her power to injure. You could never trust a child not to use her advantage. (p.206)

人をコンパスで傷つけるいじめっ子、というイメージは、<子供>が持っている否定的な要素であるが、それは、すでに述べたように、子供に伴なう幻滅感のあらわれでもあるが、Helen に、このようなイメージが与えられたとき、それは、彼女が Scobie の憐憫の対象としての受身の存在から、対等の存在へと変化していることをも明らかにしている。この変化は、Scobie にとっては、Helen が Louise と同じような女性となっていく、という落胆をもたらし、彼女をこのようにしたのは、Louise と同様に、自分の教場で<in my school>教えたからだ、と苦い責任の思いとなるのである。Scobie は思うのである。

...how much older she is than she was a month ago. She hadn't been capable of a scene then, but she had been educated by love and secrecy: he was beginning to form her. He wondered whether if this went on long enough, she would be indistinguishable from Louise. In my school, he thought, they learn bitterness and frustration and how to grow old. (p.207)

カトリックの信者であるため、Helen とは結婚できないという Scobie を追いつめ、彼の苦しみは理解しようとせず、ヒステリックに言いつのる Helen は、まさに旅行に出かける前の Louise と同じ状態である。だが、Louise と Helen が最終的に異っているのは、自分の人生に、自分で責任をとろうとする姿勢においてである。Louise は、<おねがい、どうぞ、何かして頂戴> (p. 59) と、Scobie が行動することが、彼女の生活の中心であったが、Helen は、自分の判断で一度は彼と別れることを決心している。それは少なくとも、自分のことは自分で責任をとろうとすることであり、また、Louise の帰宅によって追いつめられ、彼女たちのどちらをも

捨てきれず、苦しみ続けている Scobie への、思いやりをもあらわしている。〈あなたは私から離れていくことはなさなくていいのよ—私があなたから離れてゆきますわ〉(p.295) 〈「でも私はあなたを破滅させているだけですよ。私はどんな幸福もあげられません。」「私は心を決めてしまいました。〉(p. 297) と言う Helen は、自分の不平、不満、惨めさに直面することができなくて、旅行に逃れた Louise より、Scobie の憐憫にからむ愛情を押返す強さと、〈やさしさ〉をそなえていると言えよう。Helen が彼を慰めようとして泣き出した時、彼は、〈彼女は何処でこの胸の裂けるようなやさしさを身につけたのだろう？ 何処でこんなに急速に老成することをみんなは学ぶのだろう？〉(p. 295) と思うのである。Scobie の被護の下にある生徒であった彼女が、彼の教場〈my school〉ではなく、彼の知らないところで学んだ〈やさしさ〉は、彼女が、Scobie から独立したひとりの女性として彼の前にいることを表わしている。

Scobie の死後、Helen がかみしめている孤独も、彼女の成熟する精神を、明らかにしているところである。彼の死後、接近して来た Bagster と共に居て、Helen は、〈私は独りだわ、彼女は自己憐憫を感じないで思った、それをひとつの事実として見つめながら、仲間が風雨や危険にさらされて死んだ後の探険家のように〉(p. 319) と描写され、確かな事実としての Scobie との愛、そして、その終りとを知る女性になっているのである。彼女にとっては、〈見知らぬ男〉(p. 318) としか思われたい Bagster の背に向って、彼女は問いかける。

'Do you believe in a God?',

'Oh well, I suppose so,' Bagster said, feeling at his moustache.

'I wish I did,' she said, 'I wish I did.'...

She was alone again in the darkness behind her lids, and the wish struggled in her body like a child: her lips moved, but all she could think of to say was, 'For ever and ever, Amen...' The rest she had forgotten. She put her hand out beside her and touched the other pillow, as though perhaps after all there was one chance in a thousand that she was not

alone, and if she were not alone now she would never be alone again.

(p.318)

Scobie への愛と、彼によって Helen に残された死という暗闇のなかで、彼女が手触りで求めている、独りではないという確かさは、思い出せない祈りが示すように、与えられないままである。しかし、Helen が、彼の死と彼の愛の思い出によって、自分が孤独な存在であることを知る女性になっているのと対照的に、Louise は、孤独の意味を知らない女性のままである。Scobie の死後も強引に求愛し、結婚を迫る Wilson に、<そんなことはありそうもないようですわね、でもいつかそうなるかも知れませぬわ。私は孤独がどんなことをするのか知りませぬもの> (p. 314) と言う Louise は、早すぎるから接吻はしないが、Wilson と手をとり合せて、空ろな部屋にすわっている。その姿は将来、彼と結婚するであろうことを暗示しており、彼女は、人間としての真の孤独に目覚めることなく、再び同じような愛を繰返していくであろう、と予想される。このような Louis と Helen の姿を比較するならば、Helen の方が、人間としての真実の姿に目覚めていく可能性を秘めている、と考えられるのである。

作者は、この Helen 像について、<Helen, the girl whom Scobie loves, gains an unfair advantage> (注²⁰) と述べている。これだけであるから、この <an unfair advantage> が、具体的に明らかでないが、Louise が、Scobie の視点からのみ描かれていることの不利を述べた直後であるので、構成上、Helen の方が有利な立場に立った、というのであるとすれば、それは、Helen に与えられた役割のためではないだろうか。何故なら Helen もまた、Scobie の視点から描かれているからである。Helen の役割は、Scobie を愛することであり、妻である Louise に比べれば、愛人という役割は明確であるから、人物像として、輪郭がはっきりと、明瞭になるからではないだろうか。

真険に人を愛することによってのみ知る、人間の真の孤独から、人間としての生き方に目覚めていくという、人間としての成熟の可能性を秘めて

いる点で、Helen の姿は、*The End of the Affair* の Sarah の姿に少し接近している、と考えられる。Helen が心の中にかすかに抱いた神への想いが、Sarah という女性のなかで、成長していつているのだと思われるが、この点については、稿を改めて考えてみたい。さらに、Sarah 像と対峙していると思われる *The Living Room* の Rose Pemberton の変貌の過程をも、あわせて追ってみたいと思う。

注

- 注1 *Graham Greene and the heart of the matter*, by Marie-Béatrice Mesnet, Greenwood Press, Publishers, 1972, p.64. 著者は Berdyaev のことばを引用して、愛と憐憫の違いを述べている。
- 注2 遠藤周作著、「宗教と文学」, 講談社, 1977. p.53.
- 注3 注1に同じ
- 注4 1973年版, 序
- 注5 野口啓祐訳編,「グレーム・グリーン研究Ⅱ」, 南窓社, 1974, p.171.
- 注6 1971年版, 序
- 注7 吉田健一, 伊藤整訳,「ウォー・グリーン」, 筑摩世界文学大系79, 筑摩書房, 1976.
- 注8 注5に同じ, p.188.
- 注9 Raven 覚書,「英文学研究」第9号,梅光女学院大学英語英文学会発行,1973, 参照。
- 注10 *A Burnt-Out Case*, William Heinemann & The Bodley Head, 1974. p. 176.
- 注11 *The Basement Room* 論,「英文学研究」第8号,梅光女学院大学英語英文学会発行,1972, 参照。
- 注12 *The End of the Party* 論,「英文学研究」第7号,梅光女学院大学英語英文学会発行,1971, 参照。
- 注13 Innocence of Anthony Farrant そのⅠ, そのⅡ,「英米文学研究」第13号, 第14号,梅光女学院大学英語英文学会発行,1978,1979, 参照。
- 注14 *The Quiet American* I. II.「英米文学研究」第10号,第11号,梅光女学院大学英語英文学会発行,1974,1975, 参照。
- 注15 セアラの愛,「文学における宗教」,佐藤泰正編,笠間書院,1979, 参照。
- 注16 聖アウグスティヌス著,「告白」上,服部次郎訳,岩波書店,昭31, p.21.
- 注17 同上, p.24.

注18 *The Child Figure in English Literature*, by Robert Pattison, The University of Georgia Press, 1978. p.19.

注19 ヴィクトル・ド・パンジュ著, 「グレーム・グリーン」, 窪田啓作・般弥訳, 河出書房, 昭31, pp.89-90.

注20 1971年版, 序